アフリカ紀行 No1

今回の旅はアフリカ南部のジンバブエ・ボツワナ・ザンビア・ナミビアの4カ国をまわります。

仕事と仕事の合間で時間を捻出し行程は2週間。できる限り荷物を減らし、国内出張で使っているゼロハリのトランクと今回新調したカメラ用リュックで臨みます。つまり現地で洗濯がマストになります。

さて出発当日の朝、さっそくトラブル発生です。パスポートがどこを探しても見つからないのです。せっかく梱包した荷物をひっくり返しますがありません。ほんの4日前ベトナムから帰国したばかりでその後、行方不明、どこかで落としたのか？不安がどんどん広がります。

家族総出で自宅を隅々探しますが見つかりません。もしかしてベトナムの時に着ていた服じゃないか？まさか・そのまま洗濯してたりして・・・

パスポートもし濡れてても確認できればどうにかなるかなぁ？頭は高速にそんなことまで考える始末です。

でも残念ながら服のポケットにはありません。再度リュックを見直してみます。

それでもやっぱりありません。

うーん。あと一時間後には空港へ向かわなければいけない時間になってしまいました。ほとほと自分に呆れてアフリカを諦めかけたその時。

あっ！長男にプレゼントで買ってきたスポーツバックの中だ！よかった！ありましたパスポート！まだ見放されてなかったんですね。

いざ福岡空港へ！

そういえばちょうど一週間前、旅の手配をお願いしている代理店から、ようやく詳細のスケジュールと見積もりがメールできたのですが・・・

その価格なんと約100万円。

驚いて電話で確認すると、ホテルは5つ星・ツアーは僕一人のために設定してあり、しかも途中セスナをチャーターする贅沢なもの。

あのね。僕を富豪の息子と勘違いしてませんか？

とにかくホテルのランクダウンを含め組み直しを依頼すると、一週間後に迫った今からでは無理との返答。

聞けばアフリカの手配が得意な東京の業者に投げていたのです。いままでNY・バンコク・バングラ・キューバ・メキシコ・アリゾナ・ロス・上海と難なく手配してくれていたので安心しすぎてました。それほどアフリカは遠い国なのですね。

「わかりました。では行きは香港からヨハネスブルグ経由のジンバブエはハラレまで、帰りはナミビアからヨハネス経由の香港までの飛行機だけ手配してください。中間は僕がいまから手配します」

強気の啖呵を切り、僕は鹿児島のビジネスホテルで手配を開始しました。100万円は払えません。

調べだしてわかったのは、ジンバブエは現在スーパーインフレ中で経済は壊滅状態にあり、外務省の渡航情報が数日まえにまたまた引き上げられ極力渡航は中止せよに変わったこと。

そんな状況下、ジンバブエ航空の日本総代理店に確認すると、ハラレ>ビクトリアフォールズ線以外ほぼ運行中止になっていて、この路線も今日運行中止になってもおかしくない状況ということ。

もし飛ばなければバスで十二時間から十四時間の移動を覚悟しなければなりません。

また日本語のHPで予約できるホテルが5つ星以外無いこと。仕方なく英語のHPから予約をしました。これが極端に安い！一泊20$。

ともかく3時間かけて予約を終了してみると、合計で38万円！なんと6割のディスカウントに成功したではないですか！

やっぱり安易に人任せては駄目ですね。基本は自分でできる事は自分でやること。この精神が大切です。おかげでアフリカの距離感やイメージがずいぶんとつかめました。

ジンバブエでお世話になる友人から荷物を運ぶように依頼されてたのですが、会社に届くはずの荷物が前日になっても届かず、ジンバブエにメールで連絡すると家族の方が空港に持ってくることになり、さきほど荷物を受け取りました。

15:35

ドラゴンエアーでまずは香港へ。ちなみに福岡、香港の往復はマイルで参る！

アフリカ紀行　No2

DAY2　20080229　ヨハネスブルグ

香港を南アフリカ航空287便で23時50分に出発し十三時間二十分。南部アフリカの玄関ヨハネスブルグ空港に朝7時40分に到着。日本とは七時間もどる時差です。南アフリカはトランジットのみで、同航空会社の022便でジンバブエの首都ハラレへ。

出発は10時50分（トランジット約三時間）　空港で気がついたのだけど、運行停止中と聞いていたエアジンバブエが9時30分に1本飛んでいました。この便に乗り換えだと一時間以上早く目的地へ到着したはずです。

空港にある喫煙所はお洒落なラウンジになっていて、珈琲一杯で利用可能でPC用の電源にネットは無線LANでクレジット決済で利用可能になっています。お酒は朝十時までNG。

携帯電話は3Gの電波をローミングして電話もメールも快調に使えます。

それにしても出発用の電光掲示板を見ているとと知らない都市名がズラリ。

でもどこの国なのかさえ見当もつきません。日本ではアフリカの情報ってあまり報道されてないので気にしてネットでチェックするなどしないと身につきません。

免税店には、さすがワインの産地だけあってかズラリと揃っています。

またサッカーのワールドカップに向けて空港もエレベーターの改修など修復工事が目立ちましたが改修なんかしなくても近代的で立派な施設です。

ヨハネスブルグは危険だと聞きますが空港内はもちろん安全です。

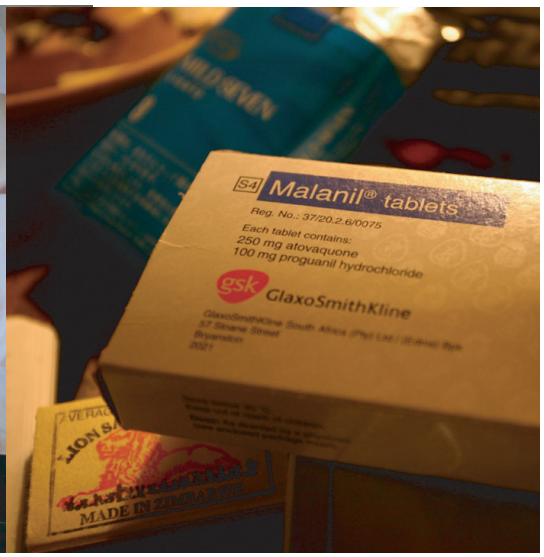
さて待ち時間中に薬局でMalanilというアンチマラリアのタブレットを購入しました。なにせアフリカはマラリアの汚染地域です。

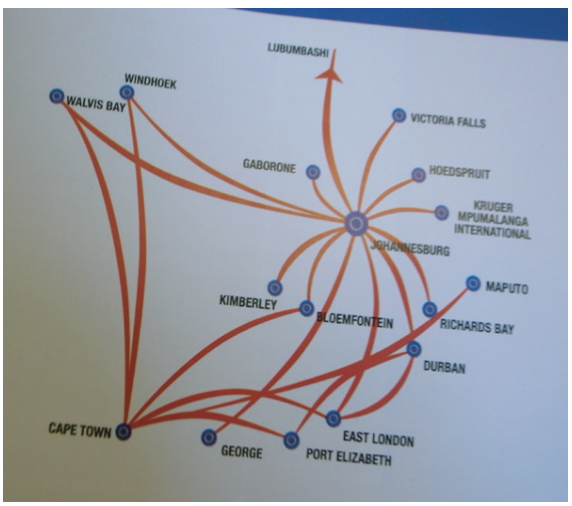
日本で処方されるタブは一種類であまり効果が高くないそうですが、このタブは強力なのでしょうか？最近はマラリアも結核菌のように耐性バージョンが登場しているそうです。

ちなみにハラレは1700メートルの高地にあるため媒体となる蚊がいないそうですが、次の目的地であるヴィクトリアフォールズはばっちりマラリア汚染区域です。

マラリアになる前3日前に飲み始めその後14日間の服用が必要です。

そんなわけで長い待ち時間を経て定刻通りに出発。ハラレまでは二時間のフライトです。





アフリカ紀行 No3

DAY2 20080229 ハラレ到着

機内食を食べて少しウトウトしたところでハラレに到着です。日本を出て丸一日。ようやく最初の目的地へたどり着きました。

ジンバブエの入国はイミグレの手前でVISAを購入します。US$で支払います。そしてお隣で入国審査。何も問題なく入国して荷物をピックアップ。税関申告なしの通路を通って外へ。

ジンバブエ在住でモチベーションシートユーザーの池渕さんと合流。

ハラレ滞在中お世話になります。

彼女のカローラに荷物を積んでいざ出発。僕は早速カメラを取り出すと「駄目ですよ！空港の撮影は！」とまず忠告。過去も知り合いが空港で撮影していてポリスに捕まったそうです。

ただいまジンバブエは3月末の大統領選挙真っ只中でかなり情勢はシビアなのだそうです。今年のはじめにケニアで選挙結果が原因で暴動が起き多数の死亡者がでてます。

さて経済が滅多滅多でスーパーインフレ中のジンバブエですが、今年の初めに100万円札が出たのも束の間、その上の1000万円札が登場、その名もテンミリオン札。高額紙幣がでるたびに交換レートは跳ね上がり、あまりのインフレにデノミ（通貨切下げ）も実施しているそうですがイタチごっこだそうです。それにしても凄い単位ですね。

US1$の公式レートは3万ジンバ$と実勢レート（闇レート）現在1US$＝2000万ジンバ$とまったく対応してませんから、もし空港やホテルなどで交換しようものなら、まったく価値のないお札になります。なんと実勢レートと闇レートの差はなんと666倍です。

もちろんブラックマーケットは認められていませんが、毎日毎日交換レートは上昇しているそうです。

さて僕らはカローラに乗ってジンバ最強の観光名所バランシングストーンの見学に行きました。ガイドブックの写真を見て知ってはいたのですが、ポツンと3メートル程度の遺跡っぽいものだろうとあまり期待はしていませんでした。ところが！

観光スポットに行く手前から、なんとも巨大な石が無造作に積まれた石のオブジェが複数見えてきました。それはオーストラリアのエアーズロックを小さくしたような巨石系から、まったく理解不能なオブジェまで・・・とにかく自然が作ったものでは絶対にありません。それほど積み方やデザインに統一感がないのです。それに遺跡のように元建物の感じもまったくありません。言うならば子供が無造作に積んだ積み木のようです。

いわゆるストーンヘンジです。ミステリーサークルの仲間ですね。宇宙人・巨人・なんて理由も理解できます。百聞は一見にしかず、驚きます。

ぐるり回って市内へ。ホテルはハラレで最高級デラックス5つ星のミークルーズホテル。チェックイン後、池渕亭へ。大統領官邸のそばにあるマンションのペントハウス。屋上からはハラレが見渡せてバーベキュー施設も完備していて完璧！日本でこんなマンション借りたらいくらするんでしょうか。

リビングからはゴルフ場のグリーンが飛び込んできて、ほんとに素晴らしい眺めでした。池渕さんにはホテルまで送ってもらい今日はお別れ。

僕は少し休憩した後、リコー製コンパクトカメラGR2をポケットに忍ばせ町を探索に・・・昼間なのに一時間歩いてもアジア人はおろか白人も一人すれ違っただけ。背後に壁を背負いカメラをパシャリ。後で見てもなんとも腰の引けた写真です。

ショッピングセンター「イーストヴィレッジ」でミネラルウォーターとトマトチーズロールサンドを買って腹こしらえ。その後歩いてお腹が空いたので、今度はドーナツを購入。どちらもそんなに美味しくはないけれど食べれないことはなし。

町には緑が溢れていて端整な街並み、ファーストフード店に映画館そしてショッピングモールまで、ちょっと全体的に照明は暗めですが予想より普通です。アジアのような喧騒も客引きもなく、たまに遠くから遠慮がちにヘイと掛けられる程度です。

ちなみに言葉はバリバリ英語です。

すれ違う人は「ハーイ・ハワユー？」と挨拶を掛けてきます。

暗くなると街歩きはやめてくださいねの忠告どおりホテルへ。

屋上にあるプールサイドのバーへ。ビールを飲んだあとジョニーウォーカーをロックで一杯。隣に座った白人は、この国でプラチナを採掘していてジンバブエはアフリカで2番目にプラチナがとれるんだと聞きました。いったいその外貨はどこに消えてるいるんでしょう。

お風呂に入ろうと思ってお湯をためたら茶色だったのでシャワーで我慢。日記を少し書いて就寝。

アフリカ紀行　No４

DAY３　20080301　ハラレ

朝５時半に起床。少し空が明るくなってきたので一眼レフキャノン５Dをリュックに詰めて街へ。

早朝も早朝ですから人も車も疎らなわけで、これなら安全と踏んでのことです。

それでも現地人らしき黒人がパラリ歩いています。気温は十三度くらいでヒンヤリしていて爽やかです。足早にまずは昨日の夕方、人が溢れていたバスターミナルへ。周囲に万全の注意を払いつつ撮影開始。

眼でみるよりもカメラに記録された映像は空の色も街の感じもいい感じ。高いビルは数棟のみで後は三階程度の工場らしく建物だけです。

ただアフリカっぽい地平線に太陽がドンという絵ではないので、撮影ポイントを探しながら太陽の昇る方向へ進んでいきます。

空はどの方向もオレンジやピンクに染まりはじめ、当初東と思った方角と反対を撮影していて振り返ると、やはり当初の方角が正しかったようで、ギラリと存在感を示しつつ眩しい太陽が顔を出してきました。

建物が邪魔しないスポットを探しつつ１キロほど進むうちに自転車や徒歩で通勤する人が増えてきました。車はまだ少なくたまに乗り合いバスが黒煙をあげて通りすぎます。

中央分離帯のある片側２車線のバイパスらしき道の真ん中から一直線に伸びる道路の先にオレンジ色で輝く朝日を狙います。

アングルを変えながら調子にのって撮影をしていると、一旦通り過ぎた黒のホンダ・インテグラが先の交差点を折り返し僕の横でスピードを落とすと声を掛けてきました。

嫌だなぁと思い無視して反対車線へ移動します。車が通りすぎるのを確認して撮影を再開。と思ったらインテグラが少し先で方向を変え戻ってきました。

しかたないので、また反対車線へ小走りに逃げます。ちょうど分離帯を挟んでサークル上になっているので都合がよいのです。

今度は大丈夫かと思っていたら、また方角を変えて戻ってくると今度は車から降りて僕を伺っています。

挑発しすぎたかと思いつつ５００メートル位で睨み合うようなりました。男はこちらを伺っています。

車がホテルの方角にあるため、反対に歩くと逆方向へ進むことになるので僕も動けないのです。

困ったなぁと思っているとガードマンらしく制服を着た自転車のおっちゃんがやってきたので、その自転車を盾にして逃げようと考案。

おっちゃんは、きっとなんか変なアジア人だなと思いながらも、持ち前のフレンドリーさで話掛けてきました。

インテグラの男は分離帯でドアの傍に仁王立ちをしたままです。ちょうど男を通り過ぎようとしたその時。男は道路を渡って僕に向かって来ました。

おいおい。まるでストーカーだなぁと思っていたら男はお尻のポケットから何やらＩＤのようなモノを提示して近づいてきたのです。

「おいお前なぜ逃げる」男はたぶんそう言いました。

「さっきから何を撮影している」僕もようやく事態がつかめてきました。

「俺はポリスだ。ちょっと事情を聞くので車に乗れ」たぶんそう言ったと思います。仕方なくインテグラの助手席に乗り込みます。男は再度警察であることをＩＤを提示しながら脅しなのか手錠をちらつかせました。

男は私服警官だったのです。

眼の前から昇ってくる朝日をインテグラの中で拝むとは・・・

「お前はゼネラリストか？」

ゼネラリスト？質問の意味がわからず聞き返すとゼネラリストではなくてジャーナリストか？と聞かれたようなので「ツーリストで朝日を撮っていたのだ」と答えます。

「そうか。じゃあなぜ逃げた？ランニングでもしていたのか？」

「あんたが追っかけて来るから怖いので逃げた」と正直に答えました。

途端男は笑い出し。少し街を案内しようと行ってホテルと逆方向に走りだしました。緊張からなのか車内が暑いのか汗が噴出してきます。本当に大丈夫なのでしょうか心配です。

車はスピードを上げながらどんどん進み、住宅街の一角で止まると振り返り「ここが俺の家だ」と男は言いました。厳重に鍵のかかったドアを開け中に入れという仕草をします。

うーん中に入っていいものか？

一瞬そう思いましたが断れる状況ではありません。手前の大きな家の奥にとうもろこし畑がありその奥にコンクリートで出来た真四角の棟が５つばかり見えます。

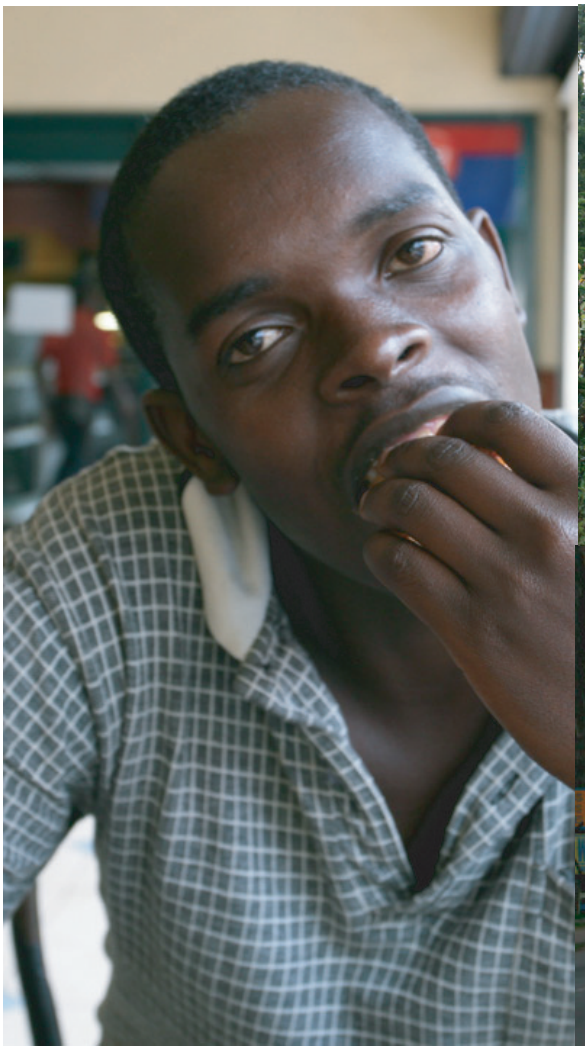
男がひとつのドアを開けると３畳ほどの小さな部屋に、ベッドと小さなテレビとオーブントースターが見えました。男は「リアルジンバブエ」だと現状の悲惨さを伝えたかったようです。

無言のまま僕は頷くと、どうやらホテルまで送ってくれるらしいので少し安心しました。すると現金なもので途端に腹が減ってきたので一緒に飯でもどうだと提案するとナイスアイデアだと男は笑顔を返してきました。

男の名前はジェリー。よく見るとウィルスミス似のいい男です。

ホリデーズインの前にあるガソリンスタンドに併設されたピザ屋で２５㎝のピザとファンタオレンジを注文しました。僕はジェリーの分も払ったのですが、今は腹が減ってないと言いながら金だけをポケットに入れました。その後ちゃっかり僕のピザを摘んでいましたが・・・。

その後ホテルに送ってもらって時計を見ると８時１５分。それにしてんも朝から大変な目にあったものです。



アフリカ紀行　No5

20080301　支援施設

朝8時半ホテル前に池渕さんがユニセフで働く小林さんという女性と車で迎えにきました。その後海外青年協力隊の男性が働く、エイズ孤児支援のシェルターへ移動します。

道中、ガソリンスタンドに長蛇の列です。現在ガソリンがなかなか手に入らないため酷い時は一日中並ぶそうです。

コンビという乗り合いバスのほとんどは日本から運ばれてきた中古車で、中には黄色のボディにアンパンマンがデザインされた幼稚園バスがそのまま走っています。その幼稚園バスに定員オーバーの人間が寿司詰めで乗ってる様子はなんとも奇妙なものです。

さて隊員の男性はタキガミ君といってまだ20代半ばの好青年です。今日土曜日はお休みだというのに僕のために一日案内してくれるそうなので、プレゼントとしてハウスのクリームシチューとハッシュドビーフとザッカリーの3種類を渡しました。本当にありがとう！後で聞くと一人前のレトルトパックになっているものがよかったそうです。池渕さんは自宅で用事があるので僕と小林さんを置いて一旦帰りました。

施設は大きく分けて幼稚園と小学校が終わったあと食事を支援する施設からなっています。中にはウサギやニワトリを飼育していたりしますがもちろん食用だそうです。

聞くとこの施設で摂る一食のみの子供もいると聞きます。

また孤児の中にも親戚や兄弟に引き取られ比較的正常な生活を送る子供もいれば両親が揃っていてもなかなか間々ならない生活の子供もいるそうです。

施設ではパソコンの授業や英語の授業も行っていて将来に活かせる内容になっているそうです。

用務員のような仕事をしている男性は家族で施設内に住み込みです。大きな木の下に真四角のコンクリートで出来た家があって、すぐ横には、自家用のとうもろこし畑があります。

平均寿命が世界最低水準の38歳と言われているジンバブエですが、よくよく聞くと幼児の段階でも死亡が大きく平均寿命を下げている理由です。

施設の見学後、タキガミ君の案内で現地の人に混ざってコンビに乗り「ムバレ」という市場へ移動です。初めて乗ったコンビは超オンボロのトヨタのバンでしたが、車もここまで酷使されれば本望でしょう。

昨年6月に販売価格を強制的に半額にせよという無茶な価格統制令が発令され、その後マーケットから商品が一切なくなったと聞いてましたが、当時も、ここムバレにはそれなりに商品が集まっていたそうで、今回など溢れかえるほど食材や洋服また雑貨がありました。

ただし現在は大統領選挙前なので商品があるけれど、選挙後はわからないそうです。商品に限らず電気や水道も断続的にストップしていたのが最近は調子がいいそうで、これも選挙前になけなしの外貨でモザンビークから仕入れていると言いますから、選挙後はどうなるのか心配だと聞きました。

ハラレ最大のマーケット「ムバレ」に話を戻しましょう。

各地方へ向かうバスの拠点にもなっている関係で人・人・人・人の洪水です。市場の建物は強烈な日光を遮るためにトタンで屋根を組んだ簡素なものですが、それこそ所狭しと店がひしめき軒を連ねています。まさにこの雰囲気こそアフリカのイメージです。

ただなかなか一眼レフを取り出して撮影するのは勇気がいります。今回出会った人全員がカメラはNGだよと忠告するのです。市場の中にも私服警官がいるとも聞きます。

でも絶対撮影したい！

大量にバナナを売っている店の奥で黒人の男が五人、車座に座りジンバブエ札をタバコを吸いながら数えています。100枚一束で括るとバナナを運ぶためのプラスチック箱へ無造作に投げ込んでいます。

これぞ狙っていたスーパーインフレの現場です。絶対撮影したい！

店番らしき女性に写真はいいかと聞くと、すかさず「10ミリオン」といわれる。日本円で50円なので笑顔で払うとさっそく撮影です。

足元に乱暴に詰まれた札束、もし日本円で一万円なら大金持ちです。

一人の男がプラスチックに注がれた現地の酒を勧めてきました。

たぶん「どぶろく」のようなモノなのでしょう。味見をしましたが乳白色ですっぱく、美味しくはありません。

市場にはオクラ・インゲン・トマト・キャベツ・玉葱・カボチャ・マンゴ・みかん・アボガドに見たことのない野菜が少々。価格は安いわけでは無くて一般市民にはなかなか手がでないそうです。なにせ平均月収が日本円で千円といいますから、6個50円のトマトは確かに高いと思います。

海外に出稼ぎにでた兄弟からの仕送りが命綱だそうです。

アフリカ紀行 No6

20080301　海外青年協力隊
お別れパーティ

ムバレの市場を見た後、ジンバブエの主食にあたる「サザ」がハラレで一番美味しいというレストランへ。「サザ」とはトウモロコシの粉を水でよく練って蒸した料理で食べつけると癖になるそうです。今のところ僕には理解できません。

一人前分の量でもちょっと食べきれない量なので3人でシェアすることにします。炎天下の中を歩いたので冷えているビールは最高です。喉を鳴らして流し込みます。注文した「チキン・サザ」は簡単にいえばクリスピー気味のフライドチキンに高菜の油炒めにトマトソースが一枚のお皿に盛られた料理で、これをインド人のように手で食べます。

味は意外にも美味しくて驚いたのですが、それもそのはず鶏はもちろんブロイラーではなく正真正銘の地鶏なわけで、それを揚げれば美味いのですね。

食堂のまわりをブラリ歩き、大統領選のポスターをパシャリ。近所の子供がタキガミ君のところに集まってきます。

何をしてたの？

すぐそこのプールで泳いでたの！

へぇプールがあるんだ。（公営の立派なプールがあります。他にもバスケットコートや野球場に観戦スタンドのある多目的施設など充実してます）

子供が30人を超えたので全員で記念撮影。

露店で「みかん」らしき柑橘系果物を見つけて購入。食べるとまさに日本のミカンでびっくり。甘みもしっかりしていて丸です。ジンバブエのある場所で栽培されているようです。

15:00　海外青年協力隊のお別れパーティーへ飛び入り参加。

まったく関係のない僕を快く参加させて頂きありがとうございました。

2年の任期満了と、政情不安定が原因の一時帰国（隣国移動手続）の隊員総勢十名のために料理とお酒をみんなで持ち寄ったアットホームな送別会です。（3か月に一度程度で各地方に散っている隊員が集まる会が催すそうです）

さて料理で一通りお腹を満たすとガーデンコンサートのはじまりです。

サックスにクラリネットにギターに三味線それにオカリナ！演奏に自信のある人もない人も楽しそうです。とくにスキマスイッチの「奏」は身に染みました。まさかジンバブエで聞くとは想いもしませんでしたけれど。

陽も沈み演奏が終わった後、帰国する隊員一人一人が、それぞれ任務への想いや辛かった思い出を涙で言葉に詰まりながらも語ります。なんか素晴らしい瞬間立ち会えてよかったです。

ほぼ同年代の若者がアフリカでこんなにがんばってるなんて・・・。もっと彼らの奮闘を日本で紹介すべきだと思います。聞けば聞くほど彼らの勇気と決断そして精神性の高さに驚きます。

また現地で彼らを取り巻く外務省の方や警備のために警視庁から赴任している方、また現地に根を張っちゃった邦人の方。そういった方々の暖かい支援があることも初めて知りました。

20:00　タイ料理屋「ブルーバナナ」で池渕さんとお昼に一緒だった小林さんとお食事。

21:30　ホテルに戻ると早朝の警官から「飯でも食べようとホテルに来たがいないから帰った」とメッセージ。律儀なのか何なのか・・・

長い一日でした就寝。

アフリカ紀行　Ｎｏ７

20080302　ビクトリアフォールズへ

ホテルを朝7時にチェックアウト。

電話代だと思われる追加料金をＵＳ３０$支払う。公式レート計算なので法外に高いようです。このホテル５つ星でありながらマッチ費一箱もないってこの国の状況を物語っています。

警官のジェリーがわざわざ会いに来てくれて少しお話。それにしても昨日と同じ格好からも彼の生活が大変なのがわかります。池渕さんの車で空港へ

本当に飛ぶのか心配だったエア・ジンバブエにチェックイン。荷物は預けると5回に一回は行方不明になるそうなので2個とも機内持込です。

珈琲とサンドイッチを買う（45ミリオンＺ$＝実勢レートで約225円）喫煙はカフェの横から外で。すれ違う全員が「ハローハワユー？」と気軽に挨拶をしてくる。単なる挨拶でその後何かあるわけではない。ジンバブエの人は極めていい人達なのです。それなりの犯罪はあるにせよ、出来るだけ争わない事を求める国民性なのだそうです。

09:00　搭乗
10:30　ビクトリアフォールズ（以下ＶＦ）空港に予定通り到着。手荷物だけなのでスムーズに空港の外へ。一番元気のあるタクシードライバーを選んで宿泊先の「ビクトリアフォールズ・バックパッカー」と伝える。

空港から街まではＵＳ３０$と一律決まっているようです。

ドライバーはスタンフォード君３１歳で既婚・子供２人。ＶＦはハラレと比べて簡単いえば単なる田舎。予想してたよりも観光地化もしていません。一部の高級ホテル内は治外法権化して超ラグジュアリーのようです。

宿に着くなりチェックイン。朝二時にも関わらず他の宿泊客はいないようですぐに部屋へ案内される。トレイシーという小太りの白人女性が対応してくれる。この宿はＮＥＴで直接、今日から３日間と予約したのだが、２日に変更してくれるよう伝えると、何も問題なく変更してくれた。

しかも一泊ＵＳ30$だから二泊で60$です。とっても安いですね。

約八畳の広さの部屋には、電気の照明が２つ（停電時はロウソクになるようです）ダブルベッドとテーブル。それからお湯の出るシャワーと洗面台とトイレ（バスタオルとハンドタオルを完備）ただし石鹸・歯ブラシ・カミソリ等備品はありません。もちろんクーラーはなく・テレビやコンセントはありません。（ボトルウォーターはＵＳ２$・ビールは３$・ランドリーサービスは３$）

それでも清潔なうえ木陰の下にあるので涼しくてクーラーは必要ありません。住めば都になるでしょう。夜は蚊帳（モスキートネット）でマラリア予防です。

ヨハネスブルグで買ったアンチマラリアのタブを飲んでます。

@　@　@　@　@　@

少し休憩した後、スタッフのダリルに念願のビクトリアフォールズへ車で送ってもらう。ゲートの前でレインコートを借りていざ滝の音のする方へすでに霧雨がメガネを濡らしています。

ビクトリアフォールズは複数の滝から構成されていて、その横幅1700m・最高落差はなんと108mで世界三大滝に数えられています。

ちなみに他はナイアガラの滝とイグアスの滝です。

広大な敷地を左端から攻めて行きます。アフリカ最大の観光地のわりに観光客はパラパラです。さて問題の滝です。爆音をともなって流れ落ちる土色の滝はまさに大迫力。

なんでも雨季のため通常よりもザンベジ河の水量が多く、おかげで巻き上げる水煙であたり真っ白。レインコートを着ているのに嵐の中にいるようでパンツまでズブ濡れ。おかげで靴もびしょびしょ。サンダルがマストです。

とても写真どころではありません。もし防水仕様のカメラで臨んでも真っ白な水煙で何も見えません。

途中ラスタな二人組と出会う。ジャマイカからかと尋ねると、ハラレから観光に来たと言う。ジンバブエはブラックピープル発祥の地らしく、ボブマーレーに同名の歌がある。

ともかく敷地が広いので国境を越えてザンビア側からも見る予定でしたが疲れてしまって断念。ヘリコプターから空撮も考えたのですがこれも時間の関係で断念。

夕方から滝に落ちる前のザンベジ河のサンセットクルーズです。

タイ・バンコクのチャオプラヤ河やベトナムのメコンクルーズと比べて、さてどんな感じなのでしょう楽しみです。

アフリカ紀行　No8

DAY4　20080302
サンセットクルーズ

13:00　ビクトリアフォールズ・バックパッカー

靴がズブ濡れのため、フロントで過去の宿泊客の置いていったらしいサンダルを借りる。部屋に戻って洗濯。レストランでボロネーゼペンネを注文（US$6）最悪に不味い。

14:00　夜食を仕入れにタウンのセブンイレブンへ約15分歩いて行く。（実際は朝7時から夜の7時まで）日曜日のため、お土産店以外のほとんどの店は閉まっています。店の品揃えは薄くほぼ何もありません。

蚊取り線香1箱・マッチ2箱・瓶入りコーラとマリークッキー・ポテトチップスと袋麺を2つ。これで100ミリオンZ$（約500円）

帰りはタクシーで宿へ

15:30　サンセットクルーズへ
運転手は黒人のフューチャー君。ガイドは白人のダミアンさん。お客さんは僕とオーストラリア人のマークの2人。

船着場のある「A'ZAMBEZI RIVER LODGE」へ車で丘を越え山を越え約15分間の移動。国立公園内にある、このロッジはプールと広大な芝生の敷地が立派な施設で次回来ることがあれば、ぜひ泊まってみたいです。

16:00　クルーズスタート。ジンバ産のキャッスルビールで乾杯です。

日没19時頃までの約3時間とたっぷりのクルーズ、2基のエンジンが唸り河を下っていきます。

ダミアンは終始忙しく、ソニーのHDカメラとキャノンの40Dで撮影をしています。聞けば後で編集してDVDをくれるそうです。残念ながら今回持参したレッツノートで見ることができないので帰国した後のお楽しみになります。

それにしてもロッジを離れると河の両サイド、建物らしくものは一切ありません。すれ違う船もなくほぼ視界のすべてに人工物が見当たらないのでバンコクやベトナムよりも空が広く身近に感じます。

まず頭を半分くらい出しているカバの集団、次に水を飲みに川縁にやってきた象とクロコダイルに遭遇。見上げると上空は鷹がゆっくりと旋回しています。そしてたくさんの日本ではお目にかかれない鳥。強い西日が照りつける中、船は大自然を進みます。日除クリームを買ってなかったことを後悔。

ビクトリアフォールズへと流れ込む2キロ前で停泊。滝がある方向は雲まで届くほど水煙が立ち上がっている様が、滝の凄さを語っています。

中州に上陸して軽食を食べ少し休憩。水温を確認に水際へ行くと「クロコダイル」に襲われないようにと警告を受ける。蛇なんかもきっといるんでしょうね。

西の空が赤らんで来たと思ったら急に風が冷たくなってきました。変わり映えのしない景色ですが、雄大な自然に心が洗われていきます。動物に逢えるかどうかは「おまけ」という事で、逢えなくても問題なし明日はボツワナのチョベ国立公園でゲームドライブです。

それにしてもアフリカで船に乗るとは予想外がでした。

19:30　宿に戻ると、レストランは19時で終了していたので電気ポットで、お湯を沸かして「マギー」の袋麺を食べる。もしレストランがやってもメニューはインスタントのボロベーゼペンネとトマトスパと現地のサザが2種類だけですから利用することはありません。

シェア利用のキッチンには、鍋や食器は数種類ひと通り用意してありますが、調味料関連が一切ありません。（しかも日曜日はコンビニしか開いてません・VFB到着は平日をお勧めします）

携帯電話はローミングしているのですが通話できません。

20:30　今日の日記を簡単に書くと、新しい蚊取り線香に火をつけ蚊帳に入って就寝。

アフリカ紀行 No9

DAY5 20080303
チョベナショナルパーク

05:30 鳥の声で起床。コケコッコーという鶏の鳴き声に混ざってジャングルっぽい音が聞こえます。何にもすることがないのでフロントへ行ってパソコンとビデオを充電。(ここフロントにしかコンセントがありません)そしてパソコンのUSBに携帯電話とiPodを接続して充電。

朝食は用意してあったトーストとインスタント珈琲と昨日調達していたマリークッキー。出発まで日記を記入する。

07:30 ボツヌワへ向け出発。今日もマークと僕の2人。フューチャー君の運転で国境まで連れて行ってもらいます。道路はところどころ穴があるけれど、すべて舗装されています(日本の田舎と同じ程度です)

途中キリンに遭遇。あまりに普通にいるので写真も撮らずに呆気にとられます。他にもサルや鹿など・・・。ほぼ一本道を真っ直ぐ走っていきます。

08:40 ジンバブエの出国手続き。靴の裏を消毒して歩いて今度はボツヌワへ入国。どちらの手続きもスムーズに終了。記入も会話もすべて英語。待機していたボツヌワ側の車に乗り込む。

ボツヌワは現在とても経済状態が良好のようでそれを反映してか道路はジンバブエのように穴があいてません。

09:05 サファリロッジに到着。ここで同乗する他の参加者を待ちます。このロッジ。大型のプールと高い吹き抜けのラウンジやレストランに白人が溢れていてプーケットにあるリゾート施設かと思うほどです。

09:30 遊覧船に乗り込む。同乗者はロンドンから参加した老夫婦2組とアメリカから参加した女性。そして日本人で野口さんという女性。彼女は週末ケープタウンで開催される歯科の麻酔学会に出席するそうで、その前にビクトリアフォールズとチョベの観光を予定に組んだというのです。

なんでも12歳の頃、家族でブラジルに住んでいて、その時、100日間家族と共に船で世界を一周したそうです。その旅でケープタウンやダーバンなどの港に降りたそうです。

10:00 30分遅れて名古屋から新婚旅行にアフリカを選んだ山本カップルが合流。4週間の予定でジンバブエ・ボツヌワ・ナミビアを旅するそうです。春から病院への勤務が決まっている新郎たっての希望で行先がアフリカに決まったそうですが、奥さんは最後まで反対だったと笑っていました。

さてボートは快晴の強い日差しの中ゆったりと進んでいきます。

チョベ河は少し先で昨日のザンベジ河に合流しビクトリアフォールズへ流れ込みます。手塚治虫の「ジャングル大帝」のオープニング曲をテーマソングに雄大な景色が流れていきます。遠くにボツヌワの国旗が見えます。約3時間のクルーズで見れた動物は、カバ・鹿・サル・ワニとたくさんの鳥。

白人は鳥が好きなようで、ガイドの説明にいちいち「ビューティフル」と関心し、とても喜んでいます。まるでバードウォッチングです。

13:00　ホテルに戻りみんなで昼食。いくつかのメニューから一番高いリブポークとフライドポテトをオーダー。飲み物はキャッスルビール。沖縄のオリオンビールのようにライトなビールです。ツアー代金をマスターカードで支払う。

13:40　入り口に泊めてあるトヨタランドクルーザーの11人乗り改造車に乗って今度はサファリをゲームドライブです。

ゲートを潜ると映画「ジュラシックパーク」のようです。日本にあるサファリパークと違って動物はすべて野生です。餌を配ることはしません。とにかく広大な敷地はエリアで区切られていません。

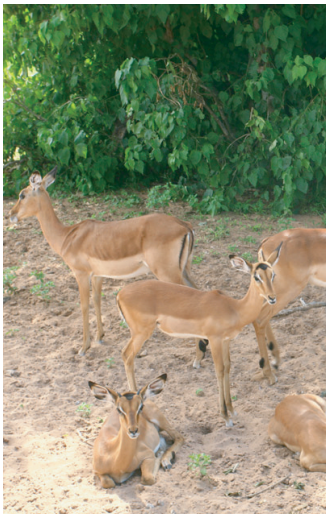
河に面した砂浜を走り象の水浴びを見学。SpringBock（鹿の一種）の大群。丘でくつろぐ雌ライオン2匹。あとはイボ猪。キリンが見れなかったのが残念。象ならプーケットで僕のイメージはサバンナを駆けるゼブラの大群やバッファローの真横をジープで併走するというものだったのですが・・・。アフリカにはたくさんの国立公園が存在していて、それこそ写真家の岩合光昭さんで有名なセレンゲティやナミビアのエトーシャなど有名なポイントがあります。

次回期待ですね。

炎天下のドライブで真っ赤に日焼けしてしまいました。日焼け止めはマストアイテムです。

それにしても白人の老夫婦はとても仲がいいですね。考えてみれば、アフリカまで旅行しようという夫婦なわけで選抜されているのですから当然ですね。ただ日本でよくある男だけの団体にはとんと出会いませんでした。

16:00　ゲームドライブ終了。ジンバブエに戻ります。車の中でひと眠り。



18:15　宿に戻る。

19:00　野口さんの宿泊する「キングダムホテル」へ見学に。

このホテル24時間のカジノが併設されていて、とにかく贅沢な作り。メインのレストランではアフリカンな音楽と踊り「ドラムナイト」が披露されています。

外で食事と思ったのですが、ホテルの一歩外は真っ暗で何もないので諦めてこのレストランで食事。ビュッフェ形式でインパラの肉を食べました。味は鹿とおなじ。まぁインパラは鹿科なので当然ですね。

21:00　タクシーで宿に戻る。なんにもすることが無いので荷物を整理して就寝

アフリカ紀行 No 10

DAY6　20080304　ナミビアへ移動

06:00　今朝も鳥の声で起床。昨日と同様フロントへ行ってビデオを充電。フロントにあるパソコンに挿されているLANケーブルを持参したノートパソコンに差し替えIPアドレスを設定しインターネットへ接続。30分US2$でメールチェックとメルマガの原稿を送信。

朝食は用意してあったトーストに苺ジャムとインスタント珈琲。

宿泊代金を現金で支払う。2泊で水3本とビール・ランチのボロネーゼ。

10:30　空港へ。荷物は預けないがここでも基本。コーラがUS4$、ちなみに水は6$。20$で払ったらレジにお金がなくて立ち往生。やっぱりお金がないんですね。野口さんと同様の学会に参加する日本人と数名に会う。売店でビクトリアフォールズの絵葉書を3枚購入6$は高い。

それとサンセットクルーズや街までの送迎込み込みでUS143$。予想よりも安い。計算間違いしてないだろうか？

支払いながら、一拍30$は安すぎるから、せめて一室でも高い部屋を設定したらと提案すると「そうか？フランス人やイギリス人は高いと言うぞなにせうちの宿はFORバックパッカーだからね」と笑っていた。

滞在中は一度も断水や停電はなかったけれど、聞くと茶飯事だそうだ。滝にはあれほどの淡水があるのに断水とは妙な話だと尋ねると「ノーブレイン・ノーパイプ」と戻ってきた。

12:30　定刻どおりSAに搭乗離陸。窓から緑の広がる台地を眺める。イタリアから来たおばさんのツアー客の間の席でやかましい。

14:16　ヨハネスブルグへ到着。トランジットの手続きもスムーズに3階にあるスモーキングラウンジへ。

クラブサンドとコーラを注文39ランド（約US10$）支払う。これが絶品。

ようやく携帯がつながったので会社と家族に電話。

ちなみにナミビア行きの人は免税店でタバコは買えないようです。

薬局で日焼け止めのローションと歯磨き粉を、売店で帽子を購入。

貴金属店には、ダイヤはもちろんタンザナイトというブルーの宝石も多数販売している。

17:25　ボンバルディー製50人乗りの小型ジェットに搭乗。約一時間半のフライトでナミビアへ。

19:10　今回の最終到着先へ到着。

19:30　入国を完了しやうやく外へ。なんと、ホテルが出迎えに来ていて驚く。

「お前が本当にオカザキか？」不思議そうな顔で女性が何度も確認する。

今回、ナミビアでの手配をアメリカンエクスプレスのコンシェルジェデスクに依頼していたのだが、なかなか手配ができないことにイライラした担当がミスター岡崎は超VIPだから、とにかくちゃんと仕事をしろと強く交渉をしたおかげで勘違いをしていたことが判明。

おかげで用意されたツアーは最高にVIPなもので総費用百万円と言う。彼女らはダークスーツにボディーガードがついた大物という予想をしていたそうで破れたジーンズに帽子・Tシャツ・リュックという格好にズッコケタそうです。

ホテルまでバンで一時間の移動。「安心して明日の朝、リーズナブルなツアーに変更するから」と太っちょのセルマという女性ガイドは終始笑ってました。

21:00　約400室を誇るナミビア最高峰4つ星ホテル「サファリコートホテル」に到着。お風呂に入ってさっさと就寝。

アフリカ紀行 No 11

DAY7　20080305　サンデューン

06:30　朝日を撮りにホテルの外へ

太陽が顔を出す直前、雲間からオレンジの光線が零れ出し周囲がメラメラと燃えるように赤く染まりだした。この一瞬を逃すとギラリとしたボスが登場してあっという間に朝焼けを消してしまう。

通勤なのだろう車が増えてきた。きちんと洗車されたきれいな車ばかりで年式もここ10年内の車体ばかりだ。自転車やバイクは少ない。

07:30　ホテルのビュッフェで朝食。普通の洋食である。

08:30　いきなりガイドが寝坊。

09:00　三十分遅れでガイドの事務所へ、遅刻はしたが手際よくナミビア滞在中の予定を組み立ててくれた。彼女の英語はとても早いので、カタログや筆談で僕の理解は半分程度だ。

まず提案があったのは、ソフススレイにあるデューン45という砂漠はとても遠いので、もっと近場にも素晴らしい場所があるぞというもの。一瞬それでもいいかと思ったが、やはりナミビアといえば、赤砂の砂漠であり、中でもデューン45はメッカである。ここまでやって来て遠いも何もないだろう。行かずの後悔よりも行って体験して後悔の方が100倍いい。

昨晩はリーズナブルと言っていたのだが、せっかくだからこの際というスタンスの僕の要望が増えるにつれ見積り金額は跳ね上がっていく。

セスナ・熱気球・バギー・砂漠の中のホテル。たった3日の内容に見積り額は軽く40万円を超えた。

電卓を叩きながら、やっぱりデューン45は諦めようかなぁと考えていたら、ガイドが神妙な顔で「君が見たヴィジョンを実行することが、君のソウルを満たすことだよ」と行ったので、やはりセスナを予定に組み入れることにした。

一時間の話し合いの末ようやくスケジュールが決定。今日はサンデューンというサバンナのど真ん中にある宿に移動してゲームドライブをすることにカードの支払いをトライするが、何度やってもできずに、アメックスのキャッシングで数回にわけてキャッシュを引き出し支払う。

10:30　白人3人(スロバニアから来たロバートとヴァーニァとアイルランドから来たクリス)と合流。今回のツアーは彼らと行動を共にするらしい。

彼らは軍で働く弁護士。ちょうど数十カ国が参加するミリタリーロイヤーの世界大会に来ているらしいのだが、内容があんまり退屈なので抜け出して来たと言う。

11:00　地元のスーパーで水やお菓子を買い込む。道中は長いからね。ジンバブエと違い、とても近代的な店内。驚いたのは生のオイスターが水槽で販売されていた。

ナミビアの中心地から住宅密集地を抜けバイパスに出る。街並はまさにドイツにいるようだと白人達が話している。僕はドイツへ行ったことがないのでよくわからない。ナミビアはドイツの植民地だった関係で地名もジャーマンな感じのものが多い。

バイパスはとにかく一本道で道路の状態はすべてアスファルトで最高。ところどころ「サイ」や「鹿がジャンプしている」イラストが描いてある警告板が見える。

郊外に2時間走ったところでラジオの電波が入らなくなった。なにせ民家らしき建物を一時間は見ていない。ところが携帯電話を見るとアンテナは3本ばっちり立っている。日本とは携帯電話の方式が違うのだろうか？

日本で計画をしている時イリジウム携帯を借りるかどうかを真剣に考えたのが馬鹿らしい。ナミビアの携帯事情は最高水準である。

サンデューンまでの道中、アフリカの現状について意見交換。ナミビアやボツヌワ・ザンビアそして南アフリカといった南部は別にして北部は相変わらず紛争や深刻な貧困や病気など大変だそうです。

13:30　3時間走ってようやく、サンデューンに到着。サバンナのど真ん中で周囲360度一切ほかの施設がないので静かで鳥と元気なハエの飛ぶ音しか聞こえません。

部屋はロシア製のテントになっていて電気も電話もありません。ちなみにシャワーはもうもうと薪を燃やし沸かします。テレビもエアコンも照明もなしです。完備されていた近代的なデザインの防虫スプレーがミスマッチでした。マラリアの危険性はほぼないそうですが100%ではないそうです。

14:30　遅めのランチ。チキンステーキとビールと赤ワイン。

宿泊者のコメントを見ると、アメリカ・カナダ・ヨーロッパ・オーストラリアと白人ばかりで、アジアはシンガポールだけで、日本人は僕が初だそうです。聞けばまだ出来て間のない新しいロッジだそうです。ゲームドライブは17:00から、それまでゆっくりとお昼寝。

16:30　風の音がしたと思ったらパラパラと天気雨が降ってきました。風が木々を揺らす音が川のせせらぎに聞こえます。

17:00　ようやくランドローバーに乗ってゲームドライブに出発です。

雲が厚いので日陰になっている時は少し肌寒いのですが、太陽が顔を出すと肌がヒリヒリするほど日差しが強いです。

それにしても360度何もないこのブッシュのすべてが個人の土地とは！いくら土地代が安いとはいえ相当な資産なのではないのでしょうか。

車は道なきブッシュを四駆で自在に走っていきます。

ゼブラの集団と遭遇。こちらが気づいたと同時に蜘蛛の子を散らすように逃げてしまいます。うーん・・・もうあまりゲームドライブには期待していない僕がいます。予想通り、3時間走って見れた動物は、大きな鹿や小さな鹿を何種類かとイボ猪だけです。

聞くと雨季のシーズンは、いたるところに池があるので動物が散ってしまうそうです。つまり乾季に来いということですね。

ただし10キロほど走った先にある3階建てのロッジで休憩した際、なんにも人工物のないブッシュに沈む夕陽は素晴らしくアフリカっぽい景色でした。暮れゆく夕日に赤ワインで乾杯。

その後、夕闇が濃いくなっていく中をライトをつけてナイトドライブ。風が冷たくなってきました。

20:00　メインロッジに戻り焚き火で暖をとり、レストランで夕食。

白人の3人とドライバーのマーセリーノと僕の5人で一人前は軽く400ｇはあると思われるナミビア牛のヒレステーキを赤ワインと食べました。

ドイツ人の男性が団体で騒いでいます。

夜空を見上げると星雲の流れが見てとれるほどクッキリと見えます。これほど宇宙をギャラクシーを身近に感じたことは初めてです。

きっと江戸時代以前は日本でもこんな空だったのかなぁ。

21:30　クリスのロッジでアイリッシュウイスキー「Jameson」を飲みながら少し歓談。アイルランド出身の彼はスコッチは飲まないそうです。

月は無くあたりは真っ暗で静かすぎるほどです。

テントとテントの間は50メートルほど離れていれ、僕のテントが一番遠いのでロバートが付き合ってくれました。

ランタン3個でテントの周囲を照らします。木々の間でなんの動物かわかりませんが赤い目玉が光ったように見えます。

遠くで動物の呻き声がします。これ以上細くなれないほど心が細くなっていきます。

テントの前には水飲み場が掘ってあって、夜中そこに動物が集まるそうですが・・・。チーターや豹もいるそうですがフェンスも何もありません。

寝ようベッドに横になってからも寝ようとすればするほど目が冴えます。

心底怖いです。やっぱり都会がいいですね。

うーん・これは寝れないなと思った次の瞬間ウイスキーが効いて来たのかコテンと寝ていました。でもこんな思い一晩で充分です。

アフリカ紀行 No 12

DAY8　20080306
ナミビアストーン

06:30　朝7時からリアルブッシュマンと歩くというウォーキングサファリツアーには参加せず。シャワーを浴びようと思ったけれど、あまりに寒くて断念。

09:00　参加したロバートやクリスから「太郎はミスを犯した・絶対見た方がよかったよ」と言われながら朝食。それにしてもご飯が美味しい。

テントのまわりで石を拾う。ただ転がっていた石なのだがよく見ると不思議な感じで記念にもって帰ることに。

10:30　宿を後にしてウィントフックを目指す。

13:15　ホテルサファリコートへ戻ってヴュッフェランチ。

ガイドにキリンが見たかったのにと言うと、別のサファリにたくさんいると言う。今から出るとちょうど夕方前からいい感じだという。

14:00　フォルクスワーゲンのバンにガイドのセルマとセルマの妹と白人3人そして僕の7人で出発。

14:30　相変わらずの一本道を高速で走って行く。途中バラバラとスコールに合う。車は大きな道から山道にハンドルを切り目的地を目指す。

14:50　ここ数日の雨で甦った幅5メートルの小川に行く手を阻まれる。ドライバーが水深を確認する。思ったより浅いということで車を進めるが、ちょうど真ん中で車がスタックして動かなくなってしまった。靴を脱いでズボンを巻くし上げ全員で押す。川の水は生温かい。

6人で押すと車は簡単に前へ進んだ。

15:00　西洋風のロッジに到着。少し休憩して、またもゲームドライブ。

15:20　まずレオパード(豹)のエリアだそうだ。今回はじめて生肉を車に積んでランドローバーは進みだした。もちろん防護用のフェンスも銃も無い。もし襲われでもしたら間違いなく死ぬだろう。ドライバーが肉を木にくくりつける。しばらくするとブッシュから用心深く、こちらを覗いながらレオパードが出てきてスルスルと木に登る。野生なのか飼われてるのかわからないが、3メートルという1ジャンプの危険な距離で生肉にかぶりつく様を見るのは迫力満点だ。

次に車は山を越え、チーターのいる高台へ。冷凍の鳥頭を撒き餌にしてチーターを呼び寄せる。あっさり茂みから現れると車のまわりを徘徊しながら餌を待つ仕草をした

次は念願のキリン。ようやくキリンの集団に遭遇。

さすが野生のキリンらしく車が近づくと半分パニック気味に逃げる。

そのスピードは長い首を持ったアンバランスな体型からは想像できない。動物園の動かないキリンとは違う。

なかなか木々が邪魔をして良いアングルで写真が撮れない。

動物の撮影なんて、ひょいと訪ねて撮れるほど簡単ではないのだろう。

望遠レンズはやはり必要だ。荷物になるからと17mmの広角1本だけで臨んだことを後悔する。

マウンテンゼブラを探しに山を2つ越えていく。とにかくこのサファリも敷地が広大だ。真っ直ぐな一本道をかなりのスピードで昇る。昇りきると連なる山々の壮大な景色が迫ってくる。動物よりもこの風景の方が価値があると思えるほどだ。

風が強くなってきた。正面にある山の頂上付近にある雲の流れが早い。あっという間に真っ黒になった。よく見ると水煙で先が見えない。

どうやら雨が強く降っているようだ。まだ僕のところは晴れているのにと思っていたら山の天気は変わりやすい、すぐに大粒の雨が落ちてきた。

急いで両端のホロを手分けしておろす。しかしフロントから叩きつける雨を凌ぐことができず、靴はぐっしょり濡れてしまった。

遠くで稲光がしたと思うと地響きをともなった爆音。もうゲームドライブどころではありません。天気雨だと思っていたら嵐の様相です。

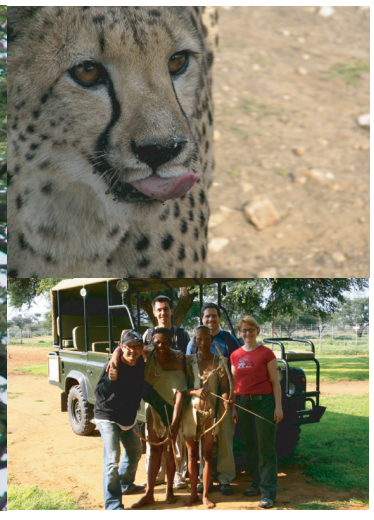
雷が連発して鳴り響きます。

ようやくロッジに戻りましたが、あまりの大雨に車から建物まで移動できず、車で雨宿り。その後クリスのおごりでウイスキーを一杯。

20:00　ウィントホックに戻り、昼間のメンバー7人で夕食。メニューにはビーフ・ポークからはじまりクードー・イボ猪・オリックスなど様々な肉が並んでいます。セルマ曰く「ある時はキリンもあるのにね」

23:00　ロバートと朝までやってる地元のクラブへ。短パンがNGで入店できず。一旦ホテルで着替える。クラブの中はオール黒人でガンガン踊っている。音楽は最新のチャートに準じていて、アフリカンなテイストは無し。

02:20　ホテルに戻る。疲れきって就寝。明日はいよいよデューンだ。



アフリカ紀行 No 13

DAY9　20080307　ソフススレイ

08:20　セルマオフィース。僕はてっきりセスナでソフススレイへ移動すると思っていたが陸路らしい。目的地まで最短距離で三百キロの移動。それも舗装されてないダートをだ。ドライバーに確認すると「5時間だね」とあっさり答えた。

09:30　ソフススレイに出発。ガソリンスタンドで飲み物と燃料を補給。真っ直ぐ十三時間走るとケープタウンにたどりつく国道B1を走る。空は快晴道路の両側には鮮やかな緑の山々が延々と続く。

10:30　ドライバーの家によりクーラーボックスを調達。

10:50　B1をはずれ横道へ途端に舗装が途切れる。車は土煙をあげながら走っていく。ところどころにある大きな穴や水溜りを避けながら進む。揺れは思ったほどではない。通りすぎる車はない。風景から民家や建物が一切消えた。こんなところで車が故障したことを想像するとゾッとする。ただし携帯のアンテナはばっちり3本立っていて通信状態は良好。

11:25　牛が放牧されている。聞くと見える範囲すべて農場で私有地だそうだ。2時間走って店も民家も見あたらない。ダートのアップダウンが激しくなってきてCDが飛びまくる。

12:30　最短でソフススレイに向うためにかなり高い山を越える。昇りきったところで、壮大な風景が飛び込んできた。SPREET HOOGTE 展望台だ。休憩のため車を泊めビールを飲む。風の音しかしない。圧倒的な景色に身震いがする。ぽつんとゲストファームが少し下手に一軒ある。帰国後ネットで調べるが検索できず。

アフリカ紀行 No 14

DAY9　20080307　ソフススレイ

14:10　ようやく今夜の宿、ソフススレイロッジに到着。九一年に開業したこの宿は、砂漠の中にある高級宿泊施設の先駆けだったそうで、内装からホスピタリティも万全だ。砂漠の中なのに小ぶりのプール。テントとコンクリートを組み合わせたコテージタイプの部屋。今回の旅で一番価格は高く一泊3万円だが、内容は素晴らしい。（照明、コンセント、テレビ、シャワー、セキュリティーボックスはあるものも、ネット、クーラー、バスは無い。飲み放題の珈琲は絶品）

部屋で少し仮眠。まだ車に揺られているようだ。

15:30　待望のDUNE45へ、ロッジから約45km離れている。それにしてもロッジからDUNEまでは立派な舗装道路だ。時速100kmでランドローバーを走らせ約30分。他のDUNEと比べ存在感のまったく違う目的のDUNE45がそのカタチをあらわした。

まさに夢に見た赤砂のDUNEだ。

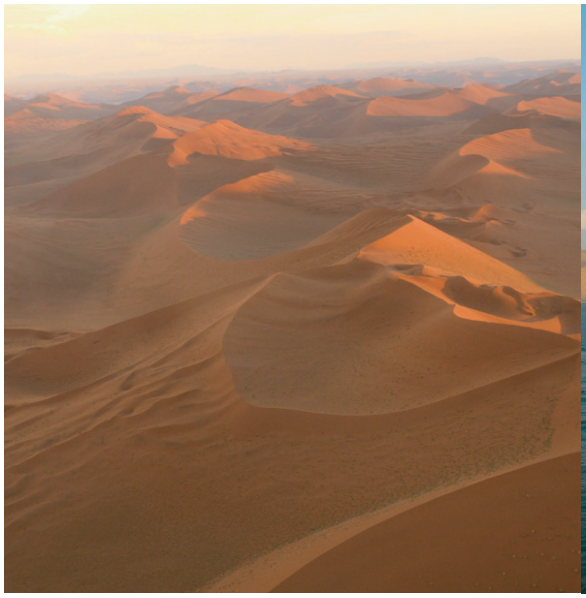
ちなみに僕は45番目のDUNEだと思っていたのですが、正解は人のいる場所から45km離れた場所にあるという意味だそうです。ガイド曰く、人が昇るDUNEはこの45だけで人間が昇ることが、この綺麗なカタチをキープすることに一役かっているのだという。

他の観光客はいない。さっそく足跡の残る縁を登っていく。キメが細かくサラサラの赤砂に足をとられ思うように昇れない。灼熱の太陽が容赦なく照りつける。暑さに息があがり、汗が噴出してくる。靴の中は砂だらけだ。

疲れてしゃがみ込むと腰まで砂に埋まってしまいそうだ。風が砂を上に上に波のように繰り返し巻き上げる。太陽が面々と連なるDUNEに陰影を与えている。360度砂漠地帯。少し昇っては、ビデオとカメラ交互に撮影する。

頂上はまだまだ遥か上だ。時計を見ると30分が過ぎていた。ガイドが遠くで「時間だ！」と叫んだ。降りる時は昇った道ではなく真っ直ぐ落下する感じで最短距離をジャンプ。これだと昇る時の一割のスピードで降りれます。楽しい。これはサラサラの砂だからできる技ですね。

18:00　今度はセスナに乗って空中から砂漠地帯を遊覧する。



ちなみにセスナは初体験。まずは砂漠地帯を抜け大西洋に飛び出しぐるりと回ってくる一時間のコースだ。

雨でできた即席の川がまるで葉脈のようです。

上空から見たDUNE45は近代アートのようです。無数のDUNEを超え大西洋に近づくと砂の色が赤から黄色に変化しています。紺色の大西洋で旋回し夕焼けをバックに来たルートをもどります。夕焼けに照りだされた赤色の砂漠群を見ていると、まるで違う星に来たようです。

砂が波のように流れていきます。

20:00　夕食。ゼブラのステーキとライオンキングのムンバを食べる。

21:00　ぐったり。就寝。

アフリカ紀行 No15

DAY11　20080308　四輪バギー

06:30　朝一番で熱気球に乗る予定であったが強風のため中止とのこと。
07:00　レストランで早めの朝食。
08:00　ヤマハ製の四輪バギーで砂漠を疾走するツアーに参加。と言っても僕とドライバーのマーセリーノとガイドの3人だけ。

昨日のセスナに比べ地面に近いからだろうか、自然を驚づかみと言う感じで大変楽しい。7年前にラスベガスでハマーで砂漠を走るツアーに参加したけれど、それよりも10倍楽しい。たぶんこの手のアクティビティーは自分が運転するか、しないかでは楽しさに雲泥の差が出るのだろう。

地形はアップダウンもあるが、真っ直ぐな道はアクセル全開だ。

デスバレーという渓谷を目指すが、昨日の夕方に降った雨で川が出来ていて迂回するが、その先でまたしても川に阻まれる。

砂漠と言っても、雨季のため意外と緑が多くて、中には可憐な黄色の花が咲いている美しい風景だ。乾季には一切の緑は消え、荒涼とした風景になるそうだ。僕は雨季もいいんじゃないかと思ったのだが、あくまで乾季がメインシーズンだそうだ。たしかに雨は、観光どころではなくなるほど激しい。

2時間があっという間に過ぎる。

日本でもこのバギーはミニカー扱いなので普通免許で乗れる。しかもヘルメットは必要ない。

10:45　チェックアウトの後、ウィントフックへ

途中、雨で川が出来ていて迂回。ボブマーリーをCDで鳴らしながら車は来た道を快調に飛ばし、山を谷を越えていく。

15:30　約5時間後ようやく到着。

16:00　マーセリーノの要望で中古車を見に行く。80万から150万でバンが並んでいる。ウロウロしていたらシートベルト不着用で警察に捕まる。罰金は日本円で5000円程度。

17:00　セルマに熱気球が強風のためキャンセルした事を伝える。返金が発生したのだ。3380ナミビアドル。日本円で約5万円なのだが、土曜日で銀行が閉まっているので払えないそうだ。そうはいっても明日は日曜日で朝一僕は出発する。一日滞在を伸ばせと無理なことを言ってくるが、もちろんそんな事はできない。

また銀行の海外送金手数料が高い。セルマのアイデアは、クレジットカード会社を介して返金すると言う方法。後日クレジット会社に確認すると、確かに可能だそうだ。手続きに必要と思われる資料をセルマに渡す。

18:00　セルマのアイデアで、タウンシップ（黒人居住区）のローカルバーへ。道で遊ぶ子供の写真をGRで撮影する。昭和30年代の日本の路地のような光景だ。

20:30　ロバート・クリス・ヴァーニャと合流、レストランへ、オリックスとクゥードーのペッパーステーキを赤ワインで食べる。

22:00　ナミビアで一番流行っているライブハウスへ。

23:30　隣の「AL・CUBANO」と言うクラブへ。

クリスとヴァーニャはホテルへ。僕とロバートの2人は残った。

ロバート曰く「太郎、今日は最終日だ朝までパーティだ」

先日のクラブよりも高級なのだろうタイトなドレスにハイヒールの女性にブラックスーツで決めた男。ナミビアに住んでいるらしい白人もいる。みんなお洒落だ。音も最新のダンスミュージックが爆音で流れている。照明は真っ暗で盛り上がらずにはいられない空間だ。振り返るとロバートが早速、黒人女性と仲良くなっている。

03:00　ホテルへ就寝。

香港

アフリカ紀行 No16

DAY12　20080309-12　帰国

08:30　起床。

08:50　チェックアウト。お土産を買いにいく。置物系をいくつか物色。

10:00　またまたセルマ遅刻のため、ZOOというカフェで朝食。ヨーロッパテイストの清潔な店内。マーセリーノに独立するなら、もっと勉強することがあるという話をする。

10:40　セルマオフィースへ。すべての問題は解決したとのこと。たぶんお金は戻ってくるだろう。近所のショッピングモールへ、アフリカ放浪すでに10ヶ月という日本人の夫婦に会う。このあとエジプトをまわって一旦帰国するそうです。

11:00　セルマのいとこと息子、クリス・ロバート・ヴァーニャと共にワイワイと空港へ。手荷物は8kgまでとの事で、香港まで預けることに。最後の最後で失くさなければいいのだが・・・。

空港の横には25N$で荷物まるごとラッピングするサービスがある。次回はぜひラップを施したい。（1N$=0.7US$）

SA-075　ウィントフック→ヨハネスブルグ　13:45発のBOEING 737　満席

15:45定刻通りヨハネスブルグへ、トランジットの手続きはこれで3度目だ。SA-286　ヨハネスブルグ→香港

17:00　この飛行機もほぼ満席。エコノミー席で13時間半のフライトは辛い。横の席にはフィリピン人男性のフレディーさん。

彼はコンテナ船の通信士で南アフリカとヨーロッパを船で往復する生活だそうだ。

6ヶ月働いて3ヶ月家族のいるフィリピンで休養、そしてまた半年働くその繰り返しだそうだ。その6ヶ月間は南アフリカからヨーロッパまで18日間、海の上で、その後約一週間陸で休養をとり海に戻るのだそうだ。

それにしても機内で世界地図を見ていたら、南アフリカは本当に遠い国だフランクフルトから8671マイル・スイスから8398マイル・HKから10687マイル・インドから6961マイル。どこからも遠い国だ。（1マイル=1.6km）

気がついたら、狭いエコノミーのシートに嵌り込んで寝ていた。

12:30　香港に到着。

日本に戻る前に香港で旅の疲れを洗い流そうという趣向だ。

ワンチャイにあるコスモポリタンホテルに宿泊。

ラッキーなことにフリーで部屋をグレードアップしてくれた。捨てる神あれば拾う神ありだ。日本人スタッフまこと君の対応もナイス。

スィートは2部屋のコネクティングで最高。それにしても香港は都会だ。

もう何度目かわからないほど滞在したが、何度来ても飽きない。セントラルの骨董街ハリウットロードを歩きお洒落なカフェで休憩。絶品の飲茶に舌鼓を打ち、チベットのソルトクォーツの灯りの中でマッサージをうけ旅の凝りを緩めた。今回も10年来の親友ピーターとも語らった。

疲れは2日の香港滞在で完全に吹き飛んだ。さぁ明日は福岡。翌日は東京でセミナーだ。

躊躇なく行動すること

アフリカ紀行

今回の旅行全般におけるテーマは「躊躇なく行動すること」。

このテーマはジンバブエの到着初日それも空港から車に乗って流れる風景を眺めていた時、撮影に最適な被写体を発見がリュックからゴソゴソとカメラを出しているうちに機会を逸したことで理解した。

大統領選挙前の緊張したこの時期、カメラはご法度。ジャーナリストは厳格に入国が規制されている。僕は何度も撮影に関して注意を受けていた。(カメラを出す僕の様子を見られて、また注意されてしまった。注意されるのは当然だが・・・)

その日夕方、リコーのGRという高性能コンパクトカメラで撮影を試みたが、どの写真も腰のひけたツマラナイ写真ばかりだった。とくにこのGRは短焦点の広角レンズという特性上、通常より一歩も二歩もグイッと近寄ることがよい写真を撮るポイントだ。

アグレッシブルに行動せよ。躊躇していたら、被写体を逃してしまう。

この瞬間は二度とやってこない。

朝焼けも夕焼けも車からの光景も子供の笑顔も動物も

モノを買う時もそうだ。工業製品のような土産を売る店ならいざしらず、ほぼ手作業の一点モノを販売している小さな店で、気に入った品があれば躊躇していたら機会を逃す。別の店で同様の商品を見つけることはないからである。

食べ物も飲み物もそうだ。あるべき時にはあるが無い時には無い。

どこにいくにも水は絶対だ。マラリアの薬にしても、ヨハネスブルグ空港にある薬局でなければ手に入らない。

また文句を言うべき時に文句を言わなければ、後から言う機会は二度とない。

「リッスン!アイアムカスタマー」毅然とした態度で主張するべき時は主張するべきだ。

躊躇する時間などない。飛び込まなければ見えてこない。

行動すれば答えが見える。

良い悪いは関係ない。

行動しなければ永遠に答えは明らかにならない。仮説と希望の渦の中で永遠にぐるぐると回り続けるだけだ。

その国の法律を守ること。

自分の体を守ること。

他人を傷つけないこと。

それ以外はすべて経験で片付けられる。それが生きていくということだ。

躊躇なく行動すること

このテーマが明確に決まっていたおかげで、僕は悩まずに行動できた。

悩むより飛び込めだ。複雑に考えるのはもう少し歳をとってからでいい。

アフリカから帰ってきて少しだけ発想がシャープになっている。

さて今度はどこに行こう。